

# 水泳プロジェクト

(1981年9月～2006年8月)

佐々木盛文 (千代田小学校)

## 1. はじめに

私は1996年から2006年まで水泳プロジェクト(以下、水プロ)で学ぶことができました。水プロの誕生は1981年です。私が入った1996年までの15年間については水プロの歩みがまとめられている『とどのつまりは』から読み解くことになります。水プロニュース「とど」は1982年9月から発行されています。この号によると年間計画で「実技研究会」と「プロジェクト例会」がつきに1回ずつ計画されています。そしてほぼ毎例会ごとに「とど」は発行されて10年で100号、20年で200号の「とど」が発行されています。100号までは『とどのつまりは』で、つぎの100号は『続・とどのつまりは』に収められています。実はこの20年の前に3年間の水プロのあゆみが書かれた『水泳の研究』も発行されています。

25年という長く間、続いてきたことに改めてすごさを感じます。

## 2. 「技術指導の系統性」研究

### と「グループ学習」研究

水プロは「どうやって泳げるようになるか(=「技術指導の系統性」研究)」と「どのように学ぶか(=「グループ学習」研究)」の二本柱で研究を進めてきました。『とどのつまりは』の冒頭でドル平がひとり歩きしていることへの警鐘を鳴らしています。この二つがあってこそ“子どもたちが授業の主人公になれる”という考えのもとに実践研究が行われてきました。

## 3. 理論学習と実践報告

毎年、実践報告会が行われました。二日間

にわたって行われた年がほとんどで、一人の実践に対して報告も含め2～3時間は費やして丁寧に分析をしていきました。そこから新たな実践構想や授業づくりについての視点が生まれてきました。

そして冬の水泳シーズン以外では、文献学習を行ってきました。私はかかわっていませんでしたが、水泳の歴史が書かれている『バドミントンライブラリー』という英語の本を和訳して学んだこともありました。中村敏雄の著作を毎回、読んだこともありました。実践課題が見えない時などはとくに文献学習にもどろうという話し合いがよくされました。

## 4. 文化研究

牧野さんは和歌山に伝わっている古式泳法(岩倉流)への取材を行いました。私と牧野さんで日本泳法大会を見に行ったこともありました。さらに日本泳法研究会も京都で行われていると聞き、水プロメンバーみんなで参加しました。日本水泳連盟では日本泳法部門があり、日本泳法大会は普及のため、日本泳法研究会は研究のための大会だそうで、私たちの知らないところで日本泳法が位置づけられていることがわかりました。

## 5. 水プロ発の実践課題が全国の課題に

水プロから多くの課題を発信していきました。「グループ学習」「お話し水泳」「歴史学習」「教育課程研究」などなど、その時の問題意識から実践プランを考え、報告をし、それを全国へ発信していくという流れがありました。これは毎月の例会を継続して行ってきたことと「子どもの実態」から教科内容をていねいに考えてきたからだと思います。

昨年はコロナの影響で水泳の授業が全国的にも中止となりました。しかし、水泳は必要だという声も聞こえてきます。今こそ学校が水泳を教える意義について考えなければならないと思います。